

話し言葉 vs 書き言葉：アルキダマス「ソフィストについて」

—翻訳と解説—

● 村 越 行 雄

【初めに】

現在では、「書く」が主流になっており、全ての土台に「書く」が存在していると言える。例えば、スピーチなどの「話す」場面でも、何の準備もなく話すことは少なく、事前に準備をして、それを原稿に書き、暗記してから話すことが多くある。しかし、事前の準備なく、即興的に話さなければならない機会が多くあることも事実である。そこで、「話す」と「書く」の意味を探り出す為に、古代ギリシャ時代（紀元前4世紀）に活躍したソフィストであるアルキダマスとイソクラテスに注目して、そこから見いだされる意義を明らかにしていきたいと思う。2人はゴルギアスの弟子で、アルキダマスが師匠であるゴルギアスの学校を引き継ぎ、イソクラテスが新たに学校を設立し、しかも新たに開いたプラトンの学校と対立する関係にある。そして、2人は「話す」側のアルキダマスと「書く」側のイソクラテスと言われるほど、2人の対比は有名である⁽¹⁾。今回は、アルキダマスの「話す」を取り上げ、即興的なスピーチの重要性を浮き彫りにしていくことにする。まず、LaRue Van Hookの英訳論文“On the Sophists”⁽²⁾を翻訳し、それに続けて、全体的な構成を簡単に解説することにする。

【翻訳】

(1) 多くはないが、かなりの数のいわゆるソフィストたちは、スピーチの執筆を行い、それを通して自ら自身の英知を示したと思い込み、しかし学習と訓練を無視し、話す才能においては素人のように未熟であるのに、それでもうぬぼれ、思い上がりで得意になっているという理由で、そして彼らソフィストたちはほんの僅かな能力しか持っていないにも関わらず、レトリックの技術の全てをマスターしたと主張するという理由で、まさにこれが事実であるという理由で、私は文語談話に対して正式の告誡を試みることにする。

(2) 私がここで告誡するのは、彼らソフィストたちが私自身の持っていない能力を持っていると私が考えるからではなく、私自身、他のことにより誇りを感じるという理由の為である。それは、書くことは副次的に従事するものとして行われるべきであると私が信じるからである。従って、自らの人生を書くことに費やす人たちは情けないほどレトリックと哲学に欠陥があるという意見を私は持っている。これらの人たちは、より公正な立場で言えば、ソフィストというよりは詩人と呼ばれる者たちであろう。

(3) 最初に、書き言葉が容易に攻撃され、しかもごく平凡な能力があれば誰もが気楽に、容易に行えるという理由で、人は書き言葉を非難することになる。即興的に話すこと、場に適切に話すこと、素早く議論できること、言葉に無駄がないこと、状況にうまく合わせることに、聴衆の熱望する期待を満たすこと、的を得たことを言うこと、そのような能力はまれなものであって、並外れた訓練によって得られる結果である。

(4) 反対に、長い時間をかけて、前もって熟慮した後で書くこと、前のソフィストたちの文書を比較し、同じテーマに関する考えを集めた多くの資料から、暇な時に時間をかけて改訂するこ

と、上手に話す際の巧みさを模倣すること、素人の忠告に基づいてある事柄を私的に改訂すること、繰り返し、注意深く熟考した結果、他の部分を削除し、改訂すること、本当に、これは教育のない人にとっても簡単なことである。

(5) 良きもの、公正なもの、たとえそれが何であれ、まれなものであり、獲得するのが難しいものであり、痛みを伴った努力によって得られる果実である。しかし、安っぽくて、ごく平凡なものを手に入れるのは簡単である。従って、書くことが話すことよりも簡単であるという理由で、私たちはより平凡に達成できるような書く能力を正しく考えてみる必要がある。

(6) さらに、賢明な人なら全員、優れた話し手は自らの生来の観点を少し変えるだけで上手に書くことができるようになると認めるであろうが、そのことで、この同じ力が優れた書き手を優れた話し手にすると信じる者は誰もいないであろう。なぜならば、難しい仕事を成し遂げるのできる人たちが簡単な仕事に注意を向ければ、容易に行えると仮定することは筋の通ったことだからである。それに対して、困難ことに従事することは、緩やかな訓練の下に置かれてきた人たちにとっては、努力を要する、嫌悪感を伴う仕事である。このことは以下の例から見られる。

(7) 重たい荷物を持ち上げることのできる人は、軽い荷物を上げるのに困難は全くないが、力の弱い人は重たい荷物を運ぶことができない。また、走るのが早い走者は走るのが遅い競争相手を楽に引き離すが、遅い走者は自分よりも早いライバルに遅れずに付いて行くことができない。さらに、遠くにある的に正確に命中させることのできるやり投げ選手あるいはアーチェリー選手は、近くにある的を楽に命中させるが、力の弱い選手は遠くにある標的に達しない。

(8) その類似のことはスピーチでも言える。つまり、即興的に話すことをマスターした人は、書き言葉にする為の時間と暇があれば、書き言葉においてもより優れているが、熟達した書き手は即興的に話すことになると、精神的な困惑、取りとめのなさ、混乱に苦しむことになる。

(9) また、人間の生活において、話す能力はいつでも役に立つ成果であるが、スピーチを書くことは適当な価値をほとんど見いだせないとは私は考える。即座に話す能力が演説、法廷、私的な会話に必要なことは全ての人を知っていることである。何も言うことのできない人が軽蔑的に思われれば、予期せぬ危機が起きてしまうが、それに対して、話し手の方は神のような心を持った人のように、聞き手によって尊敬されて見られる。

(10) 誤りを気づかせたり、不幸を慰めたり、怒りを静めたり、突然の告訴を論破したりする必要が起きる時はいつでも、話す能力は人間にとって助けになる味方になり得る。しかし、文章を書くには時間がかかり、危急を救う為に援助を出すにしても遅すぎる結果になってしまう。即時の助けは裁判で求められるが、言葉で書くのは時間をかけて、ゆっくりと仕上げられる。従って、賢明な人はこのスピーチを書く能力、つまり危機的な瞬間に完全に失敗する能力に恨みを持つことになる。

(11) 伝令官が「市民の内、誰がスピーチを願うのか」と告げる時、あるいは法廷の水時計がすでに流れ出している時、雄弁家が自らの書き板に向かって自らのスピーチを書き、そして暗記すべきであるとしたら、滑稽ではないであろうか。本当に、もし私たちが都市の僭主であつたら、スピーチを書く時間を与えた後で市民たちを公聴会に召喚するように、私たちは法廷を召集し、公共の仕事に関して助言を与える権力を持つべきであろう。しかし、他の人たちがこの権力を持っている訳で、従って私たちにとって、即興的なスピーチを除いて、他の何かを行うとするのは馬鹿げていないのか。

(12) 真実は、手のこんだ言い回し（散文よりも韻文に近い文章構成）を使って、苦勞して成し遂げられたスピーチには自発性と真理において欠陥があるということである。そして、そのよう

なスピーチは、機械的な不自然さとごちない不誠実さの印象を与えることになり、結果として聴衆に不信と敵意を吹き込むことになる。

(13) そして、そのことを最もはっきりと証明するのは、法廷の為に文章を書く人たちがこの術学的な正確さを避けるよう努力し、即興的な話し手のスタイルを模倣することであり、自らのスピーチを文語談話に最大限近づけないことで、最も好感の持てる印象を与えることである。そうであれば、スピーチは即興的な話し手を模倣する時に最も納得されると思われるので、このような話の形式の能力を与える訓練を特に尊重すべきではないのか。

(14) またこの理由の為に、私たちは文語のスピーチを冷遇しなければならないし、文語のスピーチはそれを作成する人たちと矛盾することになると私は考えている。それは、全ての機会に文語のスピーチを使用することが本来的にはできないからである。従って、話し手が1部では即興的に話し、また1部では決められた形式を使用する場合には、必然的に非難すべき矛盾に自ら陥ってしまい、そのスピーチはある程度芝居的で、叙情的であり、しかし他の技術的な仕上がりと比較すると、ある程度みすぼらしく、平凡なように見えてくる。

(15) 文化に関する主張をし、他の人たちを教えると明言する人が、もし書き板あるいは原稿を持っていれば、それでも自らの英知を示すことができるとするのは奇妙である。しかし、このことを知らないからといって、教育を受けていない人よりも良いという訳ではない。同様に、時間が与えられ、談話を生み出すことができるとしても、提案が出され、すぐに話し合いが始まると、素人よりも声が出なくなり、そして雄弁の技術を明言しながらも、話すことに何らの能力も持っていないように見えれば、それも奇妙である。従って、書くことに専念することが、話す能力を全く持たないことにつながるのは真実である。

(16) 人は手間をかけて、細かな文章作成に慣れてしまい、極端な注意深さで表現をリズムカルにつなげたり、ゆっくり熟考してスタイルを完成させたりしていると、いざ慣れていない即興的なスピーチを試みることになる、精神的に困惑し、混乱するのは必然的な結果である。そのような人は全ての点で好感の持てるような印象を与えることはなく、声を出さない人と相違はなく、心の準備ができていない為に、自らが扱うことを流暢に、人を引き付けるような形で対処することができない。

(17) また、長い間鎖に縛り付けられた後で解き放たれる人たちが普通に歩くことができず、その後でも、以前拘束されていた時と同じ方法で進むしかないのと全く同様に、書く習慣は、精神的な働きを不活発にさせることによって、そして話すのとは反対の訓練をすることによって、即座に反応ができない、足かせの付いた話し手、つまり全ての即興的ななめらかさを欠いた話し手を生み出すことになる。

(18) 即興的なスピーチを学ぶことは、私の意見では、困難なことであるが、また記憶することは骨の折れることであり、裁判中に決められたスピーチを忘れることは不名誉なことである。主要な題目よりも詳細の方が、同様に少ない要点より多くの要点の方が、学ぶのも記憶するのもより困難であることは、全員が一致するところであろう。即興的なスピーチでは、頭の中で主要なトピックスだけに関わり、後は話し手が進めていく中で精巧に作り上げていけばいいことになる。しかし、スピーチが事前に書かれていれば、主要なトピックスだけでなく、語や音節までも学び、注意深く記憶する必要がある。

(19) ところで、スピーチにおける主要なトピックスはごく僅かで、しかも重要であるが、語や言い回しは数限りなくあり、重要でもなく、互いに多少のズレがある。それに、1つ1つのトピックスは1度出されれば済むが、語は何度も繰り返して使用され、同じ語が使用されることが頻繁

に起きる。従って、トピックスを記憶することは簡単であるが、全スピーチを、しかも1語1語記憶するのは困難であり、面倒である。

(20) さらに、即興的に話す時、忘れることは恥ずかしいことではない。事前に決めた正確な語の順序は本質的なものではなく、従ってスピーチは滑らかに流れていくからである。もし話し手がトピックスを忘れるとしても、気楽に飛び越して、次のトピックスに進めばいいことで、そのことで困惑を避けることができる。後になって省略したトピックスを思い出すとしても、その時にそれを加えて容易に説明することができる。

(21) しかし、事前に準備して談話を話す人はそうは行かない。ごく僅かな詳細が省略されたり、言うべきところで言い忘れたりすれば、それに続いて、動揺したり、混乱したり、言われなかった語を探し出したりしなければならず、結果的に時間の無駄が生じる。時に、事実、突然黙り、不適當で、滑稽な、取り返しのつかない困惑が起きることがある。

(22) また、決められたスピーチを発表する人たちに比べて、即興的な話し手は聞き手により大きな影響力を及ぼすと私は信じている。発表のかなり前から談話を時間をかけて苦労して作成する人たちは、そのような機会を逸することがよくあるからである。余りにも長く話して聞き手を退屈させたり、あるいは喜んでもっと聞きたい時に話を止めたりすることが起きる。

(23) 事実、スピーチの長さについて、事前の見通して聴衆の気質を正確に評価することは、もし不可能でなければ、困難である。しかし、即興的な話し手は自らの談話を聴衆に適合させることができるという利点を持っており、思いのままに短縮したり、拡張したりすることができる。

(24) 以上の考察は別にして、即興的な話し手と決められたスピーチを発表する人は、訴訟の過程で生じる議論を同じようには対処できない。前者は、もし反対者から議論すべき点を得られれば、あるいは集中的に状況を考えて、自ら議論すべき点について考えつくのであれば、容易に取り入れるであろう。即興的なスピーチのみしか使用されない為、入念に仕上げていく中で議論同士の間で矛盾や混乱が生じないからである。

(25) 訴訟において用意された談話に満足する人たちを考えると、異なるものになる。もし事前に考えなかった議論がたとえ何であれ生じれば、その議論に合わせて、適切に活用することが困難な問題になるからである。また、すでに仕上げられた正確な言い回しという性質の為に即興的に改変することができず、従って幸運にも生じてくる新しい議論を全く使用できないか、たとえ使用するとしても、精巧に作り上げられたスピーチという建造物がバラバラになって、地面にたたき壊されるからである。そして、スピーチの1部は入念に準備された後で発表されるが、またスピーチの1部はでたらめに話されるという具合に、混乱した、調和しないスタイルが結果として生じる。

(26) もしそうであれば、賢明な人は幸運によってもたらされる助けを活用しないで、そして時に幸運よりも扱いにくい競争相手の協力者にもなることに賛成するのであろうか。他の技術は人間にとって役に立つ助手になりそうであるが、この技術は自然にやってくる利点を邪魔するのである。

(27) 文語談話は、私の意見では、勿論真のスピーチと呼ぶべきものではなく、幻影、外見、模倣である。私たちにとっては、銅の彫像、石のイメージ、生き物の絵について考えるのと同様に、文語談話についても考える方が筋が通っている。最後に触れた生き物の絵は単に肉体の外見にすぎず、視覚的に喜びを与えるとしても、実的な価値はないのと全く同じである。

(28) 従って、同じ方法で、1つのしっかりと固定されて動かない形式と配置を使用する書かれたスピーチは、私的に読まれれば、印象を与えることになるが、危機に際して、その厳密さの為

に、そのスピーチをする人に援助を与えることはない。そして、生きた人間の肉体は美しい彫像に比べればそれほど魅力的ではないが、多数の実際的な役割を持っているのと全く同じように、直接心から生まれるスピーチは即座に生命と行動に満ち溢れ、真の人間のように出来事に歩調を合わせるが、文語談話の方は単なる生きたスピーチの外見にすぎず、全ての有用性を欠いている。

(29) 多分、今書いているこの論文で、文語談話を自ら使用する人が文語談話を非難し、しかもギリシャ人たちの間で名声を勝ち取ろうと、文語談話を使用してそれを追い求めていくことをけなすのは、筋が通らないと主張されるでしょう。さらに、哲学者が即興的な談話を非難しながら、しかもそのことで偶然の機会の方が前もって考えることよりも価値があると思ったり、また不注意な話し手の方が注意深い書き手よりも英知を持っているとするのは、矛盾していると考えられるであろう。

(30) それに答えて、まず私に言わせてもらいたい。私が今まで言ってきたように自らの見解を表したのは、私が書く能力を完全に軽蔑するからではなく、私が書くことを、即興的に話すことよりも価値の低いものとして評価するからであり、また人は話を実践する時こそ最大の苦痛を与えるべきであるという意見を私が持っているからである。次に、私が自らここで書き言葉を使用している理由は、それについて特に自慢したいからではなく、書く能力を自慢する人たちに、ほんの僅かな努力で私自身がその人たちの談話をしのぎ、そして破壊できることを明らかにすることにある。

(31) さらに、群衆に向かって行われる、人前で見せる演説の為に、私は今ここで書き言葉を試みている。すでに何度か聞いたことのある人たちであればきっと、たとえ何であれ、提案されるテーマ全てに対して、私が必ず時宜を得た、適切な表現によって話すことのできる時を知っており、そのいつもの基準で私を吟味する。しかし、今初めてやっと私のところに来て聞くことになった人たちに対して（つまり、以前に1度も私の話を聞いたことのない人たち）、私は自らの文語談話の例を示そうと試みている。初めて聞きに来た人たちは雄弁家たちの決められたスピーチに慣れてしまっており、従ってもし私が即興的に話せば、私の能力を真の価値で評価できないことになろう。

(32) 以上の考察に加えて、文語談話から、思考において当然生じるような進歩について、最もはっきりとした証拠を見ることができる。それは、私の即興的なスピーチがそれ以前に発表したスピーチと比べて今の方が優れているかどうかを容易には見分けることができないからである。それはまた、過ぎ去った昔のスピーチを思い出すことが困難であることに似ている。まさに鏡を覗くように、書き言葉を覗けば、人は容易に知性の発達を見ることができる。最後に、私は自らの記念になるものを後に残して前に進みたいと切望しており、そして自らの思いのままに行っているのです。だから私はこのスピーチを書き言葉にしているのである。

(33) 私が書き言葉よりも即興的に話す能力を高く評価すると言う時、私は不注意な話し手を励ましている訳ではないことをはっきりと理解されるべきである。私の論点は、雄弁家は様々な考えとそれらの配置について事前に自ら準備しなければならないが、しかし口語で入念に仕上げてくのは即興的にならざるをえないということである。この人前で即興的に口語で表すことは、時宜を得た話として、雄弁家にとっては、文語談話という正確に技巧的に仕上げられたものよりも大きな価値がある。

(34) 従って、結論として、平凡な書き手ではなく、熟達した話し手になりたいと望む者は誰でも、正確な言い回しではなく、好機のマスターでありたいと切望する者は誰でも、敵として聴衆の敵意を得るのではなく、協力者として聴衆の善意を得ることに熱心な者は誰でも、それどころ

かさらに、自らの心を自由にさせ、自らの記憶を喜んで求め、自らの失念を気づかないままにさせることを望む者は誰でも、日常生活に必要で、十分に役立つ話す力の獲得に自らの心を向けさせる者は誰でも、この人は、申し分のない理由を持っていると言えるし、いかなる時にも、いかなる機会でも、即興的な話を実行することを自らの不変の関心事にさせることになるであろう。他方では、この人は文語による文章作成を楽しみの為に、そして気晴らしとして勉強することになれば、賢者によって英知を有する者であると思われるであろう。

【解説】

全体の構成は34の部分から成り、最初の(1)が序論で、最後の(34)が結論という配置である。全体的には、「書く」と「話す」が対比され、前者を非難して、後者を賞賛する関係が展開されている。文語談話と口語談話であるとか、書かれたスピーチと話されたスピーチであるとか、様々な表現が使用されているが、簡単に言えば、書くことと話すことが対比される。自然に考えれば、「書く」と言えば、著書、論文、報告書、手紙などの書くことが頭に浮かぶであろうが、ここで問題にされているのは、直接的には、談話、演説、スピーチなどの「話す」場面对象で、その為に、事前に準備され、時間をかけて、修正や加筆を繰り返しながら、完成される文章のことである。しかし、さらに発展して、「書く」こと全般に適用されるものになっていると解釈することができる。もしそう解釈すると、「書く」と「話す」の全面対決の姿が見えてくることになる。勿論、全面対決で、一方が全面否定され、他方が全面肯定されることはなく、あくまでも「話す」場面での優劣という価値判断である。つまり、「書く」が非難されて、全面的に否定され、「話す」のみが肯定されて、そののみが存在する訳ではない。ただし、「話す」が唯一存在であるとする傾向を読み取ることはできよう。ともかく、全面対決ではないことをはっきりと示すのが、(29)～(32)である。そこで、自己矛盾の回避が試みられる。書くことを非難する為に、書いて非難している訳で、「書く」ことを「書く」ことで非難するという自己矛盾に陥ることになるからである。(29)で自己矛盾の問題を提起し、(30)～(32)で5つの点から回答していく。なお、(29)～(32)を受けて、(33)で論点の明確化が行われ、「書く」に対する「話す」の優位性が明示され、結論づけられることになっており、(29)～(32)に対する結論として(33)を位置づけることができ、従って全体の締めとしての結論である(34)に対して、(33)が小結論であるとすることもできる。

(1)の序論から始まり、(34)の結論で終える構成で、(2)～(28)で「書く」と「話す」の対比が説明され、最後の締めの前に位置する(29)～(33)で「書く」を「書く」で非難することの意味が明らかにされ、そのことで全体の土台が構築され、そのことで最後の締めに入れることになる。言い換えれば、「書く」を非難しながら、もし「書く」を「書く」で非難することの意味が問われなければ、全体の土台が崩壊して、非難そのものが自己矛盾に陥り、結局自己破滅になって消滅することになってしまうからである。

少し具体的な内容について見ることにする。

(1) 序論：ソフィストたちのうぬぼれ(英知を示したとするうぬぼれ)と勘違い(レトリックの技術全てをマスターしたとする勘違い)を正す為に、文語談話に対して正式の告訴をすると宣言する。

(2) 序論の続き：(1)の告訴の宣言に続いて、告訴の理由が述べられる。「書く」は副次的に従事すべきもので、従って「書く」に一生を費やす人はレトリックと哲学において欠陥があるとされ、「書く」を重視する人はソフィストではなく、詩人と呼ばれる者である。

(3) 「話す」と「書く」の対比(1) : 「書く」との対比で、「話す」が定義される。7つの意味が提示され、最初に「即興的に話すこと」が挙げられる。単純化すれば、「話す」＝即興的に「話す」となる。

(4) 「話す」と「書く」の対比(2) : (3)の「話す」の定義に続いて、「書く」が定義される。5つの意味が提示され、最初に「長い時間をかけて、前もって熟慮した後で書くこと」が挙げられる。単純化すれば、「書く」＝長い時間かけた熟慮の後で「書く」となる。

(5) 「話す」と「書く」のたとえによる説明 : 良きものと公正なものは獲得困難であるのに対して、安っぽくて、ごく平凡なものは獲得容易であるとされ、前者が「話す」のたとえであり、後者が「書く」のたとえになる。

(6) 「話す」の優位性と「書く」の劣位性 : 優れた話し手が優れた書き手になることは容易で、可能であるが、逆に優れた書き手が優れた話し手になるのは困難であり、また不可能でもある。たとえとして、困難な仕事を成し遂げる人は容易な仕事も成し遂げられるが、逆は偽となる。

(7) (6)の例 : (6)の「話す」の優位性と「書く」の劣位性を明らかにする為に、3つの例を使用して説明される。重たい荷物を持ち上げることのできる人は軽い荷物も持ち上げることができるが、逆は偽であること、早い走者は遅い走者を追い抜くことができるが、逆は偽であること、やり投げ選手あるいはアーチェリー選手は遠い標的に命中できれば、近い標的にも命中させられるが、逆は偽であること、これらの3つの例が挙げられる。

(8) (7)のスピーチへの適用 : (7)で示された3つの例による説明がそのままスピーチにも適用できるとされ、(7)の類似性のスピーチへの適用が明示される。即興的に話すことをマスターした人は「書く」においても優れているが、逆に熟達した書き手は即興的に「話す」と精神的な苦しみに陥るだけである。

(9) 人間の生活における有用性 : (7)の類似性の(8)への適用を受けて、さらにそれを人間の生活における有用性に当てはめる。人間の生活において、「話す」はいつでも役に立つものであるが、「書く」は価値がほとんどない。そして、「話す」人は神のような心を持つ人として見なされる。

(10) 即時の対応の有無 : 「話す」能力は様々な場面で助けになり、味方になるが、「書く」能力は書くのに時間がかかる為に即座に対応できない。従って、即時の対応が求められる場面が多いのが現実であると考えれば、即時の対応が可能な「話す」能力の方が、それができない「書く」能力よりも重要となる。

(11) (10)の例 : (10)の即時の対応の例として、法廷という場面で即時に対応することが求められるケースが挙げられる。即時の対応が求められる時に、自分のスピーチを書き板に書き、その後で暗記し、そしてスピーチをするのは滑稽であり、従って「話す」能力は必要なものになる。

(12) 「書く」の欠点(1) : (10)と(11)の即時の対応において示された「書く」の問題は、真実を言えば、そこに欠点が潜んでいるからであるとされ、その欠点が述べられる。手のこんだ言い回しを使用し、苦勞して仕上げられるスピーチは、自発性と真理において欠けるところがあり、不自然さと不誠実さの印象を与え、不信と敵意を聴衆に与えることになる。

(13) 「書く」の欠点(2) : (12)を証明するものとしてある。法廷の為に「書く」人が結局即興的な「話す」スタイルを模倣し、依存することになり、もしそうであれば、最初から即興的に「話す」ことを尊重すべきである。

(14) 「書く」の欠点(3) : (13)と同じ理由で、文語のスピーチはそれを作成する人と矛盾

することになる。全ての機会で、いつも必ず文語のスピーチが使用される訳ではなく、従って1部では即興的に話し、また1部では決められた形式を覚えて使用し、そのことで自己矛盾に陥る。

(15)「書く」の末路：(12)～(14)の「書く」の欠点が明らかにされることで、従って自己矛盾に陥ることで、「書く」の末路に辿り着く。人に教育すると明言しながら、書き板あるいは原稿を持って話せば、また時間があれば談話を作成できるとしても、話し合いになって、素人よりも声を出さなければ、奇妙なことになる。結局、「書く」に専念することは、「話す」能力が全くないことにつながる。

(16)「書く」に関する慣れと不慣れ：(15)の「書く」の末路（「書く」に専念することで辿り着く末路、つまり「話す」能力の欠如）に対する例として、慣れと不慣れが挙げられる。時間をかけて「書く」ことに慣れた人は、不慣れな即興的な話に対処できなくなる。声を出さないことと変わらないことになる。

(17)「書く」習慣の欠点：(16)の「書く」ことに慣れ、即興的に「話す」ことに不慣れであることを受けて、「書く」習慣の欠点が明らかにされる。長い間鎖につながれた人は解放されても、普通に歩くことができず、以前の拘束された時のように進むのと同様に、「書く」習慣によって足かせの付いた話し手になり、即興的に対応できない話し手を生み出す。

(18)「話す」の利点（1）：(12)～(17)では「書く」が中心に述べられてきたが、ここから「話す」の利点が述べられていく。ここで記憶の問題が取り上げられる。主要なトピックスよりも詳細の方が記憶するのに困難があると考えれば、即興的なスピーチは主要なトピックスだけを覚え、後はスピーチをしながら精巧に作り上げればいいことになるが、事前に書かれたスピーチは主要なトピックスだけでなく、語などの詳細も覚えなくてはならないことになり、そこに「話す」の利点がある。

(19)「話す」の利点（2）：(18)の続きで、主要なトピックスと語などの詳細の記憶が問題にされる。スピーチにおける主要なトピックスは数が少なく、しかも重要であるが、語や言い回しなどの詳細は数が多く、重要でもない。そして、各トピックスは1度出れば済むが、語は繰り返し使用される。従って、トピックスを記憶するのは簡単であるが、全スピーチを1語1語記憶するのは困難である。

(20)「話す」の利点（3）：「話す」の利点として忘却の問題が取り上げられる。即興的なスピーチでは、忘れても次に飛ばしたり、思い出したら戻って説明することができ、スムーズにスピーチは流れていく。

(21)「話す」の利点（4）：忘却の問題の内、(20)は「話す」側の利点が述べられ、(21)は「書く」側の欠点が述べられ、対比される。事前に準備をしてスピーチをする人は、僅かな詳細でも省略されたり、言うべきところで言い忘れたりすると、動揺し、混乱し、忘れた語を探したりして、時には突然沈黙してしまうこともある。

(22)「話す」の利点（5）：ここで聞き手への影響力が問題にされる。即興的な話し手は、決められたスピーチをする人よりも、聞き手に対して大きな影響力を及ぼす。例えば、後者では、話が長くて聞き手を退屈にさせたり、逆に聞き手が聞きたいのに話を止めたりして、調整がつかない。

(23)「話す」の利点（6）：ここではスピーチの長さが問題にされる。(22)では決められたスピーチをする人の調整不可能性が欠点として挙げられたが、即興的な話し手の利点としてスピーチの長さを自由に調整できることが挙げられる。つまり、聴衆に適合させながら短縮したり、拡張したりして、スピーチの長さを調整することができる。

(24) 議論の対処方法の相違 (1) 「話す」：(12)～(17)の「書く」と(18)～(23)の「話す」の後、再び「話す」と「書く」の対比が行われる。訴訟の過程で生じる議論の対処方法について、即興的な話し手と決められたスピーチをする人が比較されるが、ここでは前者が対象になる。議論すべき点について、反対者から得られれば、また状況から考えつくのであれば、即興的なスピーチしか使用されないで、簡単に取り入れることができ、議論を取り入れても矛盾したり、混乱することなく、精巧に仕上げていくことができる。

(25) 議論の対処方法の相違 (2) 「書く」：(24)の続きで、決められたスピーチをする人が対象になる。事前に考えていなかった議論が生じると、すぐに対処できず、困難に突き当たる。幸運にも新しい議論がもたらされても、すぐに改変できず、活用することができず、活用しようとしても、スピーチがバラバラに崩壊することになり、スピーチの1部は準備されたままに話され、また1部はでたらめに話され、全体的には混乱した、調和しないスタイルになってしまう。

(26) 議論の対処方法の相違 (3) 「書く」：(25)の続きで、新しい議論が問題にされる。幸運にももたらされる新しい議論に対処できず、従って決められたスピーチをする人の「書く」技術は、自然にやってくる利点を邪魔するものである。

(27) 文語談話の特徴 (1)：ここで、文語談話は真のスピーチではなく、幻影、外見、模倣にすぎないと特徴づけられる。

(28) 文語談話の特徴 (2)：(27)に続いて、文語談話は単なる生きたスピーチの外見にすぎないと特徴づけられる。そして、直接心から生まれてくるスピーチは即座に生命と行動に満ち溢れ、それが即興的なスピーチの特徴である。

(29) 「書く」を非難する為に「書く」自己矛盾 (1)：(1)～(28)の「話す」と「書く」の対比検討が終了し、最後により根本的な問題を取り上げる。書くことを非難しているにも関わらず、まさに非難の対象である「書く」を使用して、今書いている自分がある訳で、このままでは自己矛盾に陥り、非難全てが無意味になってしまう。従って、(34)の結論の前に、考察すべき課題として、この自己矛盾が取り上げられることになる。ここでは、自己矛盾の指摘だけで終えている。

(30) 「書く」を非難する為に「書く」自己矛盾 (2)：自己矛盾の問題に対して、全体として5つの返答がなされる。第1に、書く能力を完全に軽蔑するのではなく、即興的に話すことよりも価値が低い。第2に、書く能力を自慢する人に対して、ほんの僅かな努力で私がそれをしのぎ、破壊することができることを示したい。

(31) 「書く」を非難する為に「書く」自己矛盾 (3)：第3に、初めて来た人に対して私の文語談話の例を示す為に、また文語談話に慣れてしまった人に対して即興的なスピーチでは私の真の価値を評価できないことを明らかにする為に、つまり時宜を得た、適切な表現で話すことを示す為に、あえて文語談話という形で表現する。

(32) 「書く」を非難する為に「書く」自己矛盾 (4)：第4に、思考における進歩を示す証拠は、話をすればすぐに消えてしまう即興的なスピーチでは得ることができず、従って文語談話にして残すしかない。第5に、自分の記念として残す為に、このスピーチを書き言葉にするのであり、そしてそれを後にして前に進みたい。

(33) 警告と論点：(29)～(32)の自己矛盾の問題への返答を受けて、最後に誤解を避ける意味で、警告が言われ、そして論点が示される。「書く」能力よりも「話す」能力を高く評価すると言ったが、不注意な話し手を励ますのでは決してないのであって、誤解をしないように警告する。そして、自分の論点は、様々な考えを出し、それらの配置を事前に準備することは必要であ

り、認めるが、結局のところ、スピーチで入念に仕上げる為には即興的である必要があり、それしかないことになる。

(34) 結論：最後に、いかなる時にも、いかなる機会でも、即興的に話すことが不変の関心事であることを強調して終える。

以上のように、(1)の序論、(2)～(28)の「話す」と「書く」の対比、(29)～(33)の自己矛盾、(34)の結論という全体構成にできあがっている。

【注】

(1) アルキダマスとイソクラテスの対比は、LaRue Van Hook の “Alcidamas versus Isocrates—the spoken versus the written word—” (The Classical Weekly, Vol. XII New York, January 20, 1919, No. 12) において明確な形で示されている。例えば、2人の類似性と相違性が簡潔に記述されており、2人の対比を理解する上で最適な資料である。

(2) LaRue Van Hook は、上記の論文を発表した際、その注で言及しているように、1918年5月3日開催の The Classical Association of the Atlantic States の第12回年次総会（ペンシルベニア州フィラデルフィアで開催）で発表した原稿を上記の学術雑誌に掲載したものであると言っている。また、その際、アルキダマスの英訳が存在せず、しかも明らかに翻訳に値するものであると考えて、“Alcidamas, On the Sophists”として翻訳したと言っている。それは、上記の論文と同じ Classical Weekly (January 20, 1919) に掲載された。今回は、この英訳版を使用する。